

平成16年度 基盤研究(A・B・C)(一般)研究計画調書(新規)

注1. 別途平成16年度基盤研究(A・B・C)(一般)研究計画調書作成・記入要領(鶯色)を参照してください。

注2. ※印の欄は研究機関において記入してください。

		※機関番号						
		※整理番号						
基盤研究	A・(B)・C	研究	(1)・(2)	審査区分	一般			
審査希望	分野	分科	細目		細目番号(4桁)			
	人文学	哲学	美学・美術史		2806			
部門	分割番号	総合・新領域	A・B	分割番号が付されている細目を選択した場合、				
		基盤研究(C)	1・2	どちらかに必ず○を付すること(「作成・記入要領」3.を参照)				
ふりがな		いなが しげみ		所属研究機関 ・部局・職	国際日本文化研究センター・ 研究部・助教授			
研究代表者氏名		稲賀 繁美 印						
研究課題	工芸における伝統と革新: 京都を中心とした職人産業の歴史の変遷と現状分析							
研究経費 (千円未満の 端数は切り)	年度	研究経費 (千円)	使用内訳 (千円)					
			設備備品費	消耗品費	国内旅費	外国旅費	謝金	その他
	平成16年度	8,020	3,670	850	1,000	1,000	500	1,000
	平成17年度	4,800	1,000	300	1,000	1,000	500	1,000
	平成18年度	5,800	1,000	300	2,000	1,000	500	1,000
	平成19年度	0	0	0	0	0	0	0
総計	18,620	5,670	1,450	4,000	3,000	1,500	3,000	
研究組織 (研究代表者及び研究分担者) (研究分担者も、本研究計画に常時参加する者です。)								
氏名(年齢)	所属研究機関・部局・職	現在の専門	学位	役割分担 (本年度の研究実施計画 に対する分担事項)	平成16年度 研究経費 (千円)	エフォート (%)		
研究代表者 稲賀 繁美 (46)	国際日本文化研究センター・研究部・助教授	比較文学比較文化・文化交 流史	博士	総括	8,020	30%		
研究分担者 パトリシア・フィスター(50)	国際日本文化研究センター・研究部・助教授	日本美術史	Ph.D	総括				
芳賀 徹 (72)	京都造形芸術大学・学長	近代日本比較文学史	博士	比較文化史				
原田 平作 (69)	愛媛県立美術館・館長	近代美術	博士	工芸・絵画史				
樋田豊次郎 (52)	京都工芸繊維大美術工芸資料館・助教授	デザイン工芸史	修士	工芸史				
松原 龍一 (45)	京都国立近代美術館・主任研究官	美術工芸	学士	工芸史				
畑 智子 (43)	大阪市立住まいのミュージアム・学芸員	美術工芸	博士	工芸輸出史				
鈴木 禎宏 (32)	お茶の水大学・生活科学部・専任講師	工芸史	博士	陶磁				
出川 哲朗 (52)	大阪市立東洋陶磁美術館・学芸課長	陶芸史	博士	陶磁				
後藤結美子 (30)	京都市美術館学芸員	近代日本美術・工芸	修士	陶磁				
西楨 偉 (30)	熊本大学・文学部・助教授	比較文学、日中比較文化史	博士	染織				
栗本 夏樹 (41)	京都市立芸術大・美術学部・専任講師	漆芸	博士	漆芸				
芳井敬郎 (57)	花園大学文学部 学部長	日本文化史	文学士	職人の生活文化史				
合計 13名 (うち他機関の分担者 11名)				研究経費合計(研究(1)のみ該当)	8,020			
基盤研究(A・(B)・C)		研究機関名	国際日本文化研究センター	研究代表者氏名	稲賀 繁美			

「研究計画最終年度前年度の申請」(公募要領13頁を参照)として新規申請する場合のみ記入

研究計画最終年度前年度の申請の概要

(研究代表者として行っている特別推進研究及び基盤研究のうち研究期間が4年以上で、かつ、平成16年度が最終年度に当たる研究課題の当初研究計画及びこの研究によって得られた新たな知見等の研究成果について具体的かつ明確に記入してください。)

研究種目名	審査区分	課題番号	研究課題名	研究期間
				平成 年度～ 平成16年度

特別推進研究又は基盤研究による研究計画及び研究成果

研究計画最終年度前年度の申請をする理由

研究目的

- ①科学研究費の交付を希望する期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、
- ②当該分野におけるこの研究(計画)の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義、
- ③国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、
- ④平成16年度において継続して科学研究費補助金以外の研究費(他府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費)の助成を受ける場合は、当該継続研究課題と本研究課題との相違点、
について焦点を絞り、具体的かつ明確に記入してください。

京都の「指定伝統的工芸品」は17品目、「指定外伝統的工芸品」は54品目を数え、その頻度は全国の都道府県中、他を大きく引き離して一位である。そのうち陶藝、染色、漆藝、絹織物が主要であるが、それ以外にも多くの職種が存在する。しかし近年、経済条件、労働状況の変貌に伴って、その多くが変質を迫られ、また業種によっては、現在の職人が最後の世代となり、将来に向けての技能の伝承がもはや不可能という危機的な事態に直面する現場もある。

ところが、こうした現在の危機的状況にもかかわらず、現場は職種ごとに孤立しており、分野間の情報交換は必ずしも活発ではない。現場のみならず、研究者、行政サイドともども、現在に至る歴史的変遷を総合的に把握している関係者は存在しないに等しい。また現在の危機的状況を構造的に把握する努力も、必ずしも十分な成果を生んでいない。このため将来にむけた具体的施策を提案することも、積極的にはなされているとは認めがたい。

本研究は、このように、現場、行政そして研究のいずれからも、十分には検討されてこなかった領域に注目し、問題点を集約している伝統工芸の生産現場を選別のうえ、その長期的な現地調査ならびに原材料調達経路、販路及び行政的援助施策に至る環境を再構成する。さらに伝統工芸の歴史的変遷の研究から得られた知見と、フィールドにおける調査結果とを組み合わせることにより、危機的状況の解明を課題とする。

具体的には:

次項「従来の研究経過・研究成果」にあげる共同研究会の成果に立脚して、実際の現地調査を志すものであり、同研究会の延長上で、その成果をさらに発展させ、現場との摺り合わせを試みるものである。そのため、まず、職人仕事の現場を今も支える職人ならびに芸術家の今日の状況の批判的総括に立脚して、伝統工芸の危機的状況や緊急の問題を集約している工房、生産者を数件ほど選択し、調査対象を絞る。そのうえで、

- (1)対象として選別した職場を頻繁に訪問し、作業現場との長期間にわたる信頼を築きながら、原材料の生産、供給の状況、特定の職種維持のための人的連関・伝達網も含め、現場の一次情報を収集したい。
- (2)またそれと並行して、早晩に失われる職能に関しては、原材料の入手経路、販路なども含め、ビデオ撮影、聞き書きなどの方法により、努めてその技法・職分などに関する最後の情報の確保・保存に努めたい。
- (3)さらに、社会史・経済史あるいは技術史、美術史などの領域で、それらの伝統工芸を研究してきた異分野の研究者とも協力を図り、京都を中心とした工芸の歴史的変遷と現状の問題点を洗い出したい。
- (4)とともに、伝統保存のための行政的に取り組んでいる実務担当者との接触にも努め、従来の行政的な施策の成果と限界を見極めたい。これは同時に、行政的取り組みでは扱えない、あるいは手薄とならざるを得ない領域(以下に詳述)を見極め、努めてその欠落を補うことにより、将来への提言を目指すものである。
- (5)収集した情報に関しては、伝統技法のメディア媒体による伝承を模索している視聴覚作品制作者・取材者などとの協同により、これまでの経験を生かすとともに、一般向きの伝播を前提とした取材の限界を見極め、そこでは割愛されてきたが、学術的には重要な情報を発信可能なかたちに加工する可能性を模索したい。
- (6)いずれも従来の個々ばらばらな情報収集の限界を打破し、原料提供者、制作者、仲介業者、販売担当者、享受者、研究者の相互の溝を埋め、学問領域を横断した知見を集積したい。それらを基礎として、将来における伝統工芸の再生の可能性と、そのあらたなる展開のための提言をまとめることを目的とする。

従来の研究経過・研究成果 (Ⅰ及びⅡを区別するため、Ⅰを記入後は点線を引いて分けてください。)

- Ⅰ. この研究課題又はこれに密接に関連した研究課題で、研究代表者が従来受けた科学研究費補助金の研究種目、期間(年度)、研究課題名、研究経費を記入のうえ、それぞれの当初の研究計画、研究経過及び研究成果等について、具体的かつ明確に記入してください。
- Ⅱ. Ⅰ以外で、この研究課題又はこれに密接に関連した研究課題で受けた、科学研究費補助金以外の研究費(所属研究機関より措置された研究費、他府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費を含む。)におけるそれぞれの研究経過・研究成果等について、名称、期間(年度)、研究課題名、研究者(研究代表者又は研究分担者)氏名、研究経費を記入のうえ、具体的かつ明確に記入してください。

Ⅰ 従来、これに密接に関連した研究課題で、科学研究費補助金を受けたことはありません。

Ⅱ 大学共同利用機関、国際日本文化研究センターでは、平成15年度より3年計画の共同研究として「京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来」を組織しており、年5回の共同研究会を開催している。これにより、伝統工芸の置かれた現状及び歴史的経緯に関する各分野の専門家の協力を仰ぎ、先行研究をまとめ、研究発表会に限定したかたちで、総括的な情報の収集・分析を試みている。その研究組織構成は以下のとおりである。

鶴岡真弓	(文様学)	立命館大学文学部教授
柿野欽吾	(中小企業経済論)	京都産業大学経済学部教授
龍村光峯	(織物)	日本織物保存研究会
西原大輔	(中国・朝鮮文化史)	駿河台大学助教授
西槇 偉	(中日近代美術)	熊本大学文学部助教授
畑 智子	(北米・輸出工芸)	すまいのミュージアム学芸員
林 洋子	(日仏美術交渉史)	京都造形芸術大学助教授
金恵信	(韓国近代美術)	学習院大学専任講師
北澤憲昭	(美術制度史・批評)	跡見学園女子大学教授
樋田豊次郎	(装飾美術)	京都工芸繊維大学教授
大熊敏之	(装飾美術)	三の丸尚蔵館学芸課長
土田真紀	(近代工芸・デザイン史)	三重県立美術館
玉蟲敏子	(装飾美術)	武蔵野美術大学教授
鈴木禎宏	(イギリス陶芸)	お茶の水大学専任講師
村角紀子	(近代日本美術)	東京芸術大学博士号取得
吉村良夫	(クラフト史)	美術批評家連盟会員
芳賀 徹	(比較文化史)	京都造形芸術大学学長
原田平作	(近代美術)	愛媛県立美術館館長
藤田治彦	(デザイン史)	大阪大学大学院文学研究科教授
松原 龍一	(美術工芸)	京都国立近代美術館・主任研究官
磯部 直希	(装飾芸術・工芸論)	立命館大学助手
出川 哲朗	(陶芸史)	大阪市立東洋陶磁美術館学芸課長
岸本 康志	(社会学)	京都国際工芸センター事務局長
後藤結美子	(近代美術・工芸)	京都市美術館学芸員
山田 実	(伝統保存)	日本伝統織物保存研究会事務局長
山川 暁	(染織史)	京都国立博物館文部科学技官
西槇 偉	(比較文学・比較文化史)	熊本大学助教授
金谷 美和	(工芸)	京都大学人文科学研究科・研修員
多田 哲久	(社会学)	姫路工業大学非常勤講師
栗本 夏樹	(漆芸)	京都市立芸大・美術学部専任講師

大学院学生 [特別共同利用研究員]

今井裕子	(蜷川式胤研究)	神戸大学
鶴飼敦子	(エミール・ガレ研究)	京都大学

日文研専任

早川聞多	(江戸時代美術史)	教授
井上章一	(建築・意匠)	教授
パトリシア・フィスター	(美術史)	助教授
戦 暁梅	(文人画)	日本学術振興会外国人研究院生
李 美林	(美人画)	日本学術振興会外国人研究院生
稲賀繁美	(文化交渉史)	助教授

(平成15年現在)

準備状況等 (Ⅰ～Ⅲを区別するため、点線を引いて分けてください。)

- Ⅰ. この研究課題の準備状況等について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記入してください。
 なお、この研究課題に密接に関連した研究課題の成果を進展させる場合は、そのことについて記入しても差し支えありません。
- Ⅱ. 研究を実施するために、使用する研究施設・設備等、現在の研究環境の状況について記入してください。
- Ⅲ. 海外共同研究者がいる場合の相手国研究者との連絡調整の状況など、研究着手に向けての状況について記入してください。

・上述の国際日本文化研究センターにおける協同研究を通じて、京都を中心とする伝統工芸の概要に関して、実地調査のための予備情報の収集と、フィールド調査の下準備を積み重ねてきた。

・京都商工会議所、京都国際工芸センター、京都伝統産業ふれあい館、雑誌『京都』、日本伝統織物保存研究会等、すでにさまざまに機関で蓄積されてきた情報を集め、いかなる職種のいかなる工房を集中的に調査するかの選定作業を進めてきた。

・また千家十職など、個人作家の工房も含め、専門の取り組みをしている機関の活動を見極め、必要な情報の提供を受けて行く態勢を作ってきた。

・そのうえで、既製の研究、各種報告書等との重複を避けつつ、従来調査が手薄だが、研究に主旨に照らして重要な調査領域を設定し、いかなる情報収集および新規のデータベース構築が必要かを見極めてきた。

・具体的には、雑誌『京都』(<http://www.j-kyoto.ne.jp>)に連載の伝統工芸関連取材記事をリスト・アップし、上にあげた問題意識と照らして、調査に値し、成果が期待できる具体例を選別する作業を進行中である。

・さらに、漆、絹織物、陶磁器など主要な分野を横断して共通に点検すべきだが、現在まで取組が不十分な調査項目を具体的に割り出し、アンケート調査票を作成途上である。

・と同時に、現地調査に必要なノウハウを、先行研究者との討議のなかで批判的に検討中である。

・科学研究費補助金による助成が決定次第、上記の準備に従い、具体的な現地調査に移る予定である。

研究組織を研究(1)で組織する理由等 (公募要領8～9頁を参照)

- 研究代表者と異なる研究機関に所属する研究者を研究組織の人数の1/2を超えて研究分担者として加える場合には①当該研究の特殊性及び②当該研究の遂行上、研究(1)の組織形態でなければならない理由を必ず記述してください。
- また、研究代表者と異なる研究機関に所属する研究者を研究分担者として加える研究であって、例えば、遠隔地に所在する研究機関において実施する一定規模の分担研究など、研究分担者に研究費の一部を配分しないと研究遂行上大きな支障がある場合には、研究費の一部を配分しなければ分担部分の研究実施が困難な理由を必ず記入してください。

・研究の性質上、京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学などの、専門的技術・知識をもつ研究者との協同が不可欠である。

・陶磁、漆工芸、染色、織物など業種ごとに、調査チームを構成し、フィールドワークを行う必要があることから、京都市立美術館、大阪市立陶磁美術館などの学芸員の協力も不可欠である。

研究計画・方法

〈平成16年度の計画と17年度以降の計画に分けて記入してください。
また、I及びIIを区別するため、Iを記入後は点線を引いて分けてください。〉

I. 研究目的を達成するための研究計画・方法について

①研究代表者・研究分担者の相互関係(役割分担状況)も含めて研究計画・方法を具体的に記入してください。

また、②特に初年度については、例えば、主要設備(現有設備を含む)との関連、旅費については調査予定地域や実施体制、また、研究支援者雇用費については人数や支援の内容など、経費と研究計画との関連性についても記入してください。③設備備品費又は研究支援者雇用費が各年度の申請研究費の90%を超える場合(公募要領11頁を参照)には、これらの費用に重点をおかなければならない理由を記入してください。さらに、④海外共同研究者(公募要領7～8頁を参照)との共同研究を含む場合には、その必要性及びこれらの者とのように共同して研究を実施していくのかについて記入してください。

II. 生命倫理・安全対策等に関する留意事項(該当者のみ)

①ヒトの遺伝子解析研究については、ヒト由来試料等の提供者、その家族・血縁者その他関係者の人権及び利益の保護の取扱いについて十分配慮する必要があること、②相手方の同意・協力や社会的コンセンサスを必要とする研究課題又はアンケート調査等を行う研究課題については、人権及び利益の保護の取扱いについて十分配慮する必要があること、③「生命倫理・安全対策に関する留意事項(公募要領14～15頁を参照)」に記載されている研究については、手続き等が必要とされていること、から、このような計画を含む場合には、計画について講じる対策・措置状況について具体的に記入してください。

研究計画・方法 (平成16年度)

<調査項目の選定と、業種別の追跡調査>

・ひとくちに伝統的工芸といっても、業種によって、実態は大きく異なる。現段階では、

(1)歴史研究班 (2)陶磁器研究班 (3)漆芸研究班 (4)織物・染物研究班

に研究分担者を区分し、各分野でチームを構成のうえ、調査・研究にあたる計画である。

a. 一方では、すべての研究サブ・グループに共通する調査項目を準備する必要がある。

b. 他方、業種別の特殊事情に切迫し、その原料品調達から、仕入れ、加工、出荷、消費にいたる流通経路の一部始終を追跡調査する柔軟性、取材の徹底性もまた不可欠である。

<従来での取り組みでは十分な情報が得られていない課題項目>

・共通調査項目としては、従来の行政による取り組みでは情報の収集が十分でない部分に注目したい。

即ち 1)給与体系、2)後継者養成の実態、3)行政側の情報収集の内情(配置転換のため、長期的に事情を把握している専門職が存在しない)、4)技法保存・開発などの把握、5)原材料の供給、道具の生産・供給実態の把握、6)流通・販路、マーケティング、7)地域への波及効果、雇用創出の状況、8)市場調査、消費者動向調査、購入方法--などの追跡が不十分である。

以上8項目を念頭に置き、個別の典型例・調査すべき特異例を選定のうえ、現地調査を行う予定である。

<調査方法>

・[家元・企業・個人作家の三角形パラダイム]

同一の業種の内部で、対比的な運営状況にある業者を選別し、その実態比較を試みたい。

即ち、(a)例えば千家十職のように、世襲的伝統と名声を得ている家元と、(b)大量生産の企業運営へと脱皮した企業形態の経営、(c)近代作家としての個人主義を目指した場合、という三角形は、どの業種にもある程度共通する3つの傾向であり、その分岐あるいは再統合の歴史的・社会的状況や、背景基盤などの業種別の詳しい比較が方法として不可欠となる。

・[個別ケーススタディーと追跡調査・有効な比較項目の設定]

既にマスコミによって度々取材されている、有名な家元や個人作家の陰に隠された側面にも照明を当てたい。市場の構造に対応した、こうした光と陰の文を解明する方法が必要。そのため前項の三角測量の外に、

(1)個別の職人には見えていない流通経路全体を見渡し、なぜ職人が分断されているのかを考察し、そうした状況の背後にある政治的・社会的な原因にも踏み込む必要がある。また業種によっては、匿名性と直接接点の忌避が、社会慣習上不可欠なものもある(三味線皮革加工の諸工程の場合など)。

(2)同一の職種で、何が major bland と minor とを分けるのか、いかなる要因が個人作家指向を促進し、あるいは反対に阻害し、工房のありかたを左右するのかの対比例に注目したい。

(2)また、個人名志向と匿名志向の対立など、職業意識の差異とその背景にも迫りたい。

(3)京都の名産といわれながら、技法的には他の地方にも存在する業種への着目も必要。そこから逆に「京都」というブランドの、実態と幻想の有り様を具体的に炙り出したい。その背後には、文化庁と旧通産省といった、行政の分担区分による現場の分類が引きおこす問題にも注目せねばならない。

(4)伝統の維持・継承と、個人作家志向とが両立しない業種の抱える現実への直視も必要。目立ちたがる職種と、出たがらぬ職種、さらに社会的な条件ゆえに出番が来ない職種すらある(例えば、国際比較を試みるなら、インドの場合、低位のカーストゆえ、職人は国際的催し物には招待されえない)。

<他国の現状調査>

日本における危機的状況は、海外の市場とも関連しており、海外現地調査と内外比較も必要となる。

<海外での学会発表>

海外で問題意識を共有する研究者との意見交換のため、関連海外学会での発表の機会を要する。

研究計画・方法（平成16年度（つづき））

平成16年度の調査としては、以下を目標とする。

(1) 京都を中心とする伝統工芸の実態を把握し、危機に瀕した貴重な技術およびその伝承者の存在を確認する。

(2) 伝統工芸の製作の現場取材させていただき、研究者に新たな現実認識をもたらす。現場との信頼関係の確立、流通機構全般に行き渡った調査のための、基本的な導線の確立が課題となる。

(3) と同時に、自らの体験を言語化する機会に乏しい技能伝承者・芸術家の証言を得るためのノウハウの開発を目指す。従来の学術研究による抽象化や、商業的情報伝達によって消去されている我、学術的に勝ちのある情報をいかにして確保するかが、課題となる。

(4) 伝統工芸の現状把握に必要なアプローチの構築、不可欠な研究者とその業績の集積、再吟味。これらの西行は、現場での調査で問題が生じたところで、各論により総論を練り直し、立て直した総論から、再度現場によるフィールド調査を深める、という相互作用、反復作業を伴うこととなる。

(5) 証言の取りまとめや、映像情報の取材・編集に必要な資金獲得の方策を練る。

具体的な調査活動としては

(1) 職人工房、個人作家との接触。ビデオ撮影などによる資料集積の開始。

(2) 消滅の寸前にある原材料生産、特殊技能の映像・音声資料としての保存、編集。

(3) 職人の方々への聞き取り調査とその記録(文字・映像・音声情報)の編集。

などが中心的な作業となる。

<付随する課題と計画・方法>

・工房見学で得られた音声・画像データの管理およびその共同活用に必要な環境設定、研究分担者相互の電子メールによる情報網の確立、など、研究条件および事務的条件の整備が必要となる。

研究計画・方法 (平成17年度以降)

初年度に、現場の職人、芸術家の方々と接触を開始し、情報収集に努めたのを受け、第2年度(平成17年)には、さまざまな分野の研究者の歴史的・社会的あるいは国際的視野にたった現状認識を、現場の声と擦り合わせ、今日の状況を多角的・総合的に把握する。第3年度(平成18年)には、海外の競合する同一分野の現状にも目配せし、収集した情報を総合し、未来への提言を目指す。

第2年度研究計画概要とその方法

- (1) 初年度の経験を踏まえ、研究の主要部分を、言語化、文章化する。
- (2) 研究者と、現場の芸術家・職人とで、領域ごとにサブ・チームを組織してもらい、現場から新たな情報を発掘しつつ、研究組織全体での情報共有に努める。
- (3) これにより、単なる寄せ集めの研究報告の水準を越えた全体像を模索する。
- (4) 平行して、現場の取材、証言聞き取り、映像データなどの編集作業に取り掛かりたい。

第3年次研究計画概要とその方法

- (1) 和文による研究報告書の取りまとめ作業に3年次当初から入り、英文訳稿も作成。
- (2) 映像データ、証言などの成果を、有効に社会に還元するための手段を模索する。
- (3) 諸外国の研究者、現場制作者との連絡を密にし、国際研究集会を組織をする。
- (4) 国際研究集会は、伝統工芸の現状に関する海外への最新情報の発信の機会となる。
- (5) とともに、この機会に、外国における現状報告を兼ね備えた両面性を追求する。
- (6) 国際研究集会は、つづく段階の共同研究計画への足掛かりとなることを目指す。

* 国際研究集会そのものは、本科学研究費助成金の枠外で資金調達を予定するが、その席で、本研究の成果を発表し、国際的な次元での討論を試みたい。

設備備品費の明細			消耗品費の明細	
(多数の図書、資料を購入する場合は「西洋中世政治史関係図書」のようにある程度、図書、資料の内容が判明するような表現で記入してください。)				
年度	品名・仕様 (数量×単価) (設置機関)	金額	品名	金額
16	シャープノート型パソコンメビウス・PC-SV1-7	750	フィルム	100
	DC/5CC (3×250) (日文研)		パソコンデジタルカメラ消耗品	200
	キャノン高解像度プリンターPixus・MP700 (3×40) (日文研)	120	OCRソフト	100
	キャノンデジタルビデオIXY・DV5 (3×100) (日文研)	300	画像処理ソフト	150
	陶磁器関係書籍一式 (日文研)	500	データベースソフト	300
	漆芸関係書籍一式 (日文研)	500		
	染織織物関係書籍一式 (日文研)	500		
	工芸史関係書籍一式 (日文研)	1,000		
	計		3,670	計
17	工芸史関係書籍一式 (日文研)	1,000	フィルム	100
			パソコンデジタルカメラ消耗品	200
	計	1,000	計	300
18	工芸史関係書籍一式 (日文研)	1,000	フィルム	100
			パソコンデジタルカメラ消耗品	200
	計	1,000	計	300
基盤研究(A・(B)・C) 研究機関名 国際日本文化研究センター 研究代表者氏名 稲賀 繁美				

研究業績

最近5カ年間に学術誌等に発表した論文、著書のうち本計画に関連する重要なものを選定し、研究組織欄に記入された研究者ごとに、現在から順に発表年次を過去にさかのぼって記入してください。なお、この頁で記入できない場合は、裏面を使用してください。

<p>研究代表者・分担者氏名 (所属研究機関・部局・職)</p>	<p>発表論文名・著書名 (論文名、著書名、著者名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)について記入してください。) (以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略(省略する場合、その員数と、掲載されている順番を○番目と記入)しても可。なお、研究代表者及び研究分担者にはアンダーラインを付すこと。)</p>			
<p>研究代表者 稲賀繁美 (国際日本文化研究センター・研究部・助教授)</p> <p>研究分担者 パトリシア・フィスター (国際日本文化研究センター・研究部・助教授)</p> <p>芳賀 徹 (京都造形芸術大学・学長)</p> <p>原田 平作 (愛媛県立美術館・館長)</p> <p>樋田豊次郎 (京都工芸繊維大美術工芸資料館・助教授)</p> <p>松原 龍一 (京都国立近代美術館・主任研究官)</p> <p>畑 智子 (大阪市立住まいのミュージアム・学芸員)</p> <p>鈴木 禎宏 (お茶の水女子大学・生活科学部・専任講師)</p> <p>出川 哲朗(大阪市立東洋陶磁美術館・学芸課長)</p>	<p>2002:「岡倉天心とインド」『モダニズムの越境』人文書院 pp.76-102 1999:『絵画の東方—オリエンタリズムからジャポニスムへ』名古屋大学出版会 486pp.</p> <p>2003:『尼門跡と尼僧の美術』中世日本研究所 91pp. 2002:“The Legacy of Yosa buson,”in An Enduring Vision, New Orleans Museum, pp.12-17</p> <p>2003:『詩の国 詩人の国』筑摩書房 364pp 2002:『詩歌の森へ』中公新書 385pp.</p> <p>2002:「<20世紀の日本美術>雑感、特に民族的・工芸図案的・日常的について」『美術フォーラム21 vol. 6』醍醐書房 pp.157-161 2002:「洋画家の図案と日本画、浅井忠を中心に」『浅井忠の図案展』佐倉市美術館・愛媛県美術館 pp.6-9</p> <p>2003:「工業と工芸をめぐる知の編成」『1902年の好奇心』光村推古書院 pp.238-244 1998:『明治の輸出工芸図案—起立工商会社の歴史』京都書院 216pp.</p> <p>2000:『五代・六代清水六兵衛展—京焼革新の軌跡』日本経済新聞社 pp.12-15 1998:『京都の工芸 [1910-1940]—伝統と変革のはざまに』(編著)京都国立近代美術館 pp.9-24</p> <p>2000:「セントルイス万国博覧会における『日本』の建築物」『日本建築学会計画系論文集』第532号、pp.231-238 1998:「明治10年代の輸出工芸品にみる日本イメージの創出」『デザイン理論』35号(意匠学会誌)、pp.1-14</p> <p>2003:『英国セント・アイヴスへ東と西 海を越えた絆 バーナード・リーチと濱田庄司』益子町観光振興公社 pp.63-75 1998:「『東と西の結婚』のヴィジョン—バーナード・リーチの芸術志向」『比較文学研究』71号 東大比較文学会 pp.87-108</p> <p>2001:『アジア陶芸史』(出川ほか編) 昭和堂 pp.32-56; 276-83 1998:『明末清初の民窯』(出川ほか編) 平凡社 pp.133-140</p>			
<p>基盤研究(A・B・C)</p>	<p>研究機関名</p>	<p>国際日本文化研究センター</p>	<p>研究代表者氏名</p>	<p>稲賀 繁美</p>

研究業績(つづき)	
研究代表者・分担者氏名 (所属研究機関・部局・職)	発表論文名・著書名 (論文名、著書名、著者名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)について記入してください。)
後藤結美子 (京都市美術館学芸員)	1999:「所蔵名品展1999-2 工芸と素材－1950年以降の京都から」(主催・会場:京都市美術館 会期:1999/12/14～2000/2/13) 企画及び解説文執筆 pp. 160-71 2001:「京都市美術館コレクション展第2期 戦前の工芸・工芸の胎動」(主催・会場:京都市美術館 会期:2001/1/5/25～8/5) pp.146-57
西槇 偉 (熊本大学・文学部・助教授)	2002:「ゴッホは文人画家か—豊子愷のゴッホ観」『比較文学研究』第70号 pp.4-28 2002:「東アジアから見た西洋近代美術—民国期の西洋美術受容と日本」『日本研究』第26集 pp.143-183
栗本 夏樹 (京都市立芸術大・美術学部・専任講師)	2003:「ヴィクトリア&アルバート美術館での漆芸ワークショップ」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第47号 pp.71-91 2002:「イギリスにおける漆芸:長期在外研修報告」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第46号 pp.61-73
芳井敬郎 (花園大学文学部学部長)	2001:「森寛斎の京都生活とその画業」『森寛斎展』花園大学歴史博物館 pp.6-24

研究機関名		研究代表者氏名		研究者番号							
-------	--	---------	--	-------	--	--	--	--	--	--	--

本申請課題及び他の研究課題の受入・申請等の状況・エフォート							
研究期間	省庁等の名称	研究費の名称	研究課題名 (研究代表者氏名)	代表・ 分担等	平成16年度研究費 (研究期間全体の総額) (千円)	採択(受入) ・申請中	エフォート (%)
H16~	日本学術振興会	基盤研究(A)(一般)		代表			
						合計	%

この頁は、基盤研究(A)の研究代表者のみ記入・添付

※採択されているものと申請中のものとを点線で区切って記入してください。